

再発見! 菟原住吉、昔を未来へ
住吉歴史資料館

第13号

住吉歴史資料館だより



住吉のまちかど

～ 久原邸と久原橋 大正5年(1916年)～

ちょうど100年前の久原邸と久原橋です。住吉駅北側の道を東へ行くとやがて住吉川の土手の急な坂道となり登り切ったところにかかる橋で「くはら・ばし」と読みます。邸宅の跡地にはオーキッドコートの高層建築がたちならんでいます。

久原橋のあたりはタクシーが待機したり、営業の車が一休みしたり、携帯電話を掛けたりしています。すぐ下はJRの線路で天井川である住吉川の下を抜けるトンネルになっています。お母さんとだっこされた赤ちゃんが川の下を通り抜ける電車を手を振ったりしています。この13号の7ページで現在の風景の写真を掲載しています。くらべてみて下さい。

オーキッドコートは明治37年(1904年)に政治家で実業家であった久原房之助さんが大邸宅を構えた跡です。政友会総裁、逓信大臣、久原鋳業社長などを勤めた久原財閥の総帥(トップリーダー)の超大富豪でした。

久原邸の正門は久原橋を渡ったところにあり、実は、久原橋は、久原さんが住吉駅に通うのに便利なようにと特に架けたものです。だから「久原橋」といいます。

朝、正門が開くと、馬のひづめの音がカッカカッと響き馬車に乗った久原さんが久原橋を渡り住吉駅に向かいました。また、甲南学園甲南小学校までは正門から5分程度。この写真は甲南小学校で大切に保管されているものをお貸しし頂きました。

久原邸は、むかしの武庫郡本山村野寄(東灘区西岡本)にありましたが、正門と久原橋は住吉につながっており、久原邸は住吉村の大邸宅群に含めて語られることが多いです。

100年ほど前の風景ですが、とても想像できませんね。

資料館だより 第13号目次

住吉のまちかど
久原邸と久原橋 大正5年(1916年)
.....1ページ

日本一の富豪村
住吉村(3)
住吉歴史資料館事業推進委員
前田康三.....2～5ページ

お屋敷の思い出聞き取り(1)
住吉歴史資料館事業推進委員
内田雅夫.....6～8ページ

明和六年(1769年)
住吉村は幕府の直轄領となる
神戸大学大学院人文学研究科地域連携
センター研究員
奈良教育大学准教授
住吉歴史資料館専門委員
山崎善弘.....9～11ページ

住吉歴史資料館ご案内

再発見! 菟原住吉、昔を未来へ

開館の目的は、「住吉に住む人々が郷土を理解し、それを子供達に伝え、子供達も郷土に誇りを持ち、ずっと住み続けたいと思うような町にしたい。住吉歴史資料館は文化・歴史的の面からそれをお手伝いする。」ことです。

そのため、以下を行います。

1. 本住吉神社横田宮司家に伝わる古文書の整理。関係文書、記念物、言い伝えの収集。
2. 展示物のメンテ。展示室、座敷を使用しての各種展示の企画。
3. やさしい、楽しいイベントを企画してみんなの地域への理解を深める。
4. 「住吉歴史資料館だより」を通しての広報。成果の発表。

お願い

広くみなさまからの情報、資料のご提供をお願い致します。

1. 各町協議会の古い記録類、書類。旧青年団、警防団の旗、写真 など。
2. 各お家に伝わる古い書類、絵図、古文書、写真 など。
3. 各お家に残っている、農耕具、或いは、馬や牛が牽引する荷車(いわゆる“馬力”)の道具類などの労働具。
4. 古い写真(近所、町内、住吉村、武庫郡、神戸 など)、小学校の卒業アルバム、卒業証書。
5. 災害時の記録や写真。(阪神大水害、阪神大震災、昭和42年水害 など)
6. 戦時中ののぼり、腕章、たすき、或いはバッジ、記念品など。
7. だんじり、住吉祭の写真。(渡御、宮入、宮出し など)

また、長年住吉に住んでおられる方々に気軽にむかし話をしていただいております。“ああ、あの人なら、住吉のことよお知ってはる”、という方をご紹介下さい。

編集後記

神戸大地域連携センター山崎先生のご指導を得るようになってもう半年以上、今回13号で初めて書いて頂きました。尼崎藩の領地であった住吉村が明和六年(1769年)に幕府直轄領になる経緯です。住吉では、江戸時代中期以降原始的ながら産業資本が生まれようとしていたようです。先生は近世がご専門で、今後、お宮さんにある古文書の解読を進めて頂ければ、もっと色々なことがわかってくると思います。

11号から開始した「日本一の富豪村 住吉村」が大好評、今号で3回目となります。人気の理由は、夢のような大邸宅が住吉にはずらっと並んでいたのがまず信じられない、が一番でした。という訳で、13号でも書いてみました。大富豪たちと住吉の人たちとの交流、住吉村への溶け込み、そして、空襲を免れた邸宅は敗戦後接收され外人が乗り込んできたことに触れています。そして、皆さまお待ちかね13号でも資料館で収集した邸宅の写真を大公開サービスしました。日本文化の保護者継承者でもあった邸宅のご主人、奥様方の生活を想像してみてください。

毎年、11月は、住吉小学校、住吉中学校、渦が森小学校3校合同のお茶会があり、展示では「住吉の交通の発達展」を行いました。庄屋さんの吉田家が官営鉄道開設に尽力したこと、これが大住宅地になっていききっかけとなったことなどを解説しました。

また、11月は住吉中学生たちが「トライやるウイーク」で資料館での仕事を体験してくれています。住吉のみんなが「住吉学」のプロになってほしいものです。(M.U. 記)

■資料館の作業日は毎週木曜日の午前中です。

また、別途、日曜日は展示室を開館しています。(世話人会の委員の方がお世話)

■資料館の座敷ではお茶会が「菟原茶華道会」主宰で開催されます。

平成29年は、奇数月の第2日曜日に予定されています。(1/15、3/12、5/14、7/9、9/10、11/12)

日本一の富豪村 住吉村③

住吉歴史資料館事業推進委員 前田 康三

第1回、第2回と住吉村における大邸宅の形成過程を見てきました。昭和14年(1939年)に廣海邸が完成し、大規模邸宅の建設は一段落します。大富豪たちの生活が落ち着くにつれ住民との交流が出てきて落ち着いた住宅地になります。平生鈆三郎さんたちが目指したとおり、住吉村は天下の富豪村と呼ぶにふさわしいまちになっていきます。昭和10年(1935年)から昭和15年ころがピークかと思われず。

昭和13年の阪神大水害、昭和20年の空襲戦災で住吉村は壊滅します。そして、敗戦、占領軍による神戸進駐、住吉の大邸宅に目をつけた占領軍の邸宅接収となります。

もう、住吉村は独自の道を行く、とは言えず、昭和25年(1950年)神戸市と合併し、住吉村は解村消滅します。今回は新旧住民の交流、戦後の邸宅の接収などを見ていきます。

新旧住民の交流

阪神間に名だたる住宅地として発展してきた住吉村ですが、新旧の住

民村民が作り出す独特の雰囲気は、阪神間モダニズムの気品、新しさ、それでいて伝統は踏まえるというものでした。住吉の場合は新しく人工の町を作るのではなく、既に存在していた村に新しく邸宅を建てて新来の大富豪が暮らし始め、旧来の住民と親交を結ぶに至ったという点が重要なポイントでしょう。

住吉には、既に述べたように水車工業や石材工業で財をなした旧家群が存在しており、この人たちの識見や財力は決して新しく来た富豪たちにも引けをとらないものでした。

住吉村の村政は、これら従来の旧家が中心となって運営しており、ここに新来の富豪たちが国や世界レベルの見地から助言や指導を行う形でした。両者はうまく融和共存していきます。一つの例を挙げると、「お屋敷価格問題」の解決があります。

灘購買組合はコープこづべの前身で大正11年(1921年)に設立されました。住吉村西区に邸宅があった那須善治さんが株の仲買で得た富を社会に還元するために平生鈆三郎さんの仲介で生協事業を開始したものです。

邸宅が立ち並びだした住吉の物価は高く「お屋敷価格」と言われていました。購買組合が出来て価格が下がったため、地元

の商人との間で対立が深まりました。このとき乗り出したのが「灘購買家庭会」という、今の

コープさんの婦人組合員活動のようなグループでした。メンバーは大邸宅の奥様方並びに、住吉旧家の奥様方で、彼女たちは、

お家のお台所を仕切り、地元の商店並びに「購買さん」の双方のお客様



写真① 灘生協住吉本部住吉駅前 終戦直後

でした。家庭会は、いがみ合う両者の間に割って入り、物価を安定させる

べく双方を説得したのです。女性の力が発揮されました。(写真①)

新しい住民である大邸宅の富豪たちは住吉村の伝統にも理解を示し多額の寄付をしています。

地元の本住吉神社は大阪の住吉大社の本地と言われる古社ですが、その修理にあたっては、住友吉左衛門、

野村徳七、久原房之助、弘世助太郎、安宅弥吉など日本を動かす経済界の実力者たちが多額の寄付をしています。地元旧家からは「白鶴」の嘉納治兵衛、「桜正宗」の山邑太郎左衛門が名を連ねています。寄附芳名玉垣は神社境内の西に現存しています。(写真②、写真③)

また、大富豪たちは住吉名物の「だんじり」にも寄附をしています。住吉村山田区のだんじりは昭和9年(1934年)に新調されましたが、山田区の住民でもあった野村徳七さん、武田長兵衛さんなどが寄付をしています。立派なだんじりを地元村民は熱狂して引きました。

村の教育施設にも寄附をしています。久原房之助さんは、住吉小学校にはグランドピアノを寄附し、幼稚園を住吉村仲区(住之江区)に寄附しています。これらはこの13号の別稿「お屋敷の思い出聞き取り」をご覧ください。久原邸はオーキッドコートに代わってしまいましたが、かつての正門前の「久原橋」は今も、住吉川の便利な橋として使われています。

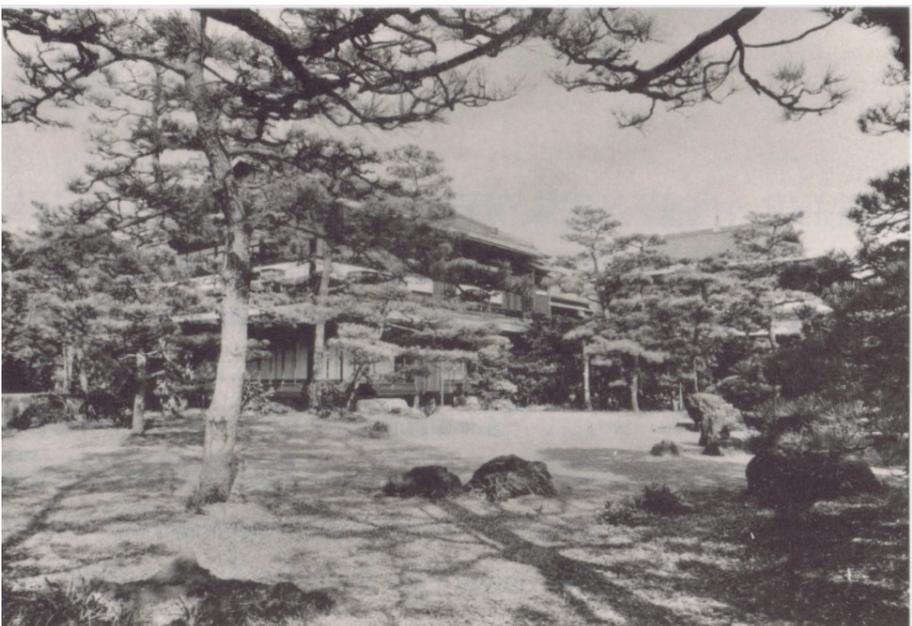
戦後の住吉村

昭和20年(1945年)3度の空襲を受け村の7割を焼き尽くされた住吉村は敗戦後復興に立ち上がり、住民たちは、焼け出されて途方にくれながらも、生きていく、食べていくために、日々懸命に暮らしました。住吉村も戦災復興に懸命に取り組みました。

戦後は急速かつ天文学的なインフレの中、預金封鎖新円切り替えなどの経済政策で、豊かな財政を誇った住吉村も綱渡りの経営となりました。戦災からの復興、それに昭和13年大水害の復興もまだ終わっておらず、住吉村最後の第十四代富永村長の就任早々の仕事は借金のために頭を下げて回ること、戦前には考えられな



写真② 本住吉神社拝殿とそり橋 大正はじめ(本住吉神社)



写真③ 住友御本家の住吉本邸書院2階(『住友春翠』)

大邸宅の接収

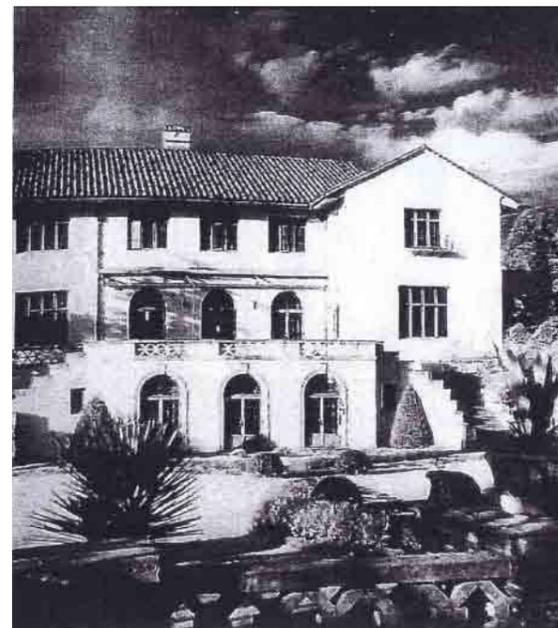
戦後、日本を占領した連合軍は神戸にも進駐してきました。占領軍は司令官クラスの軍人とそ

の家族のために住吉の焼け残った合計13の大邸宅を接収しました。山田区にある小寺（2邸）、武田、廣海、和田、乾、野村（元五郎さん邸）、鴨子ヶ原

写真⑧ これらの邸宅ではご主人方は建物明け渡し、女中部屋に引越したりして暮らしました。わび、さびの情緒のわからない外人家族が入り込んできたお家では、ペンキ



写真③ 昭和23年2月米軍撮影の廣海、武田、小寺の各邸航空写真



写真④ 廣海邸（長者たちが住んだ町と村）



写真⑤ 小寺邸（長者たちが住んだ町と村）



写真⑥ 和田邸（長者たちが住んだ町と村）



写真⑦ 乾邸

を塗られたり、日本庭園の庭木を伐られたりで閉口したといっことです。環境も変わります。住吉中学校敷地は住友御分家の邸宅跡ですが爆撃で廃墟となっていました。（写真⑥）立派な正門は焼け残っており、その角にアメリカから「踏切注意」の巨大交通標識が持ち込まれて建てられ、辻々にはアメリカ軍の憲兵MPが立ちジープが走り回りました。日本の警察も警備強化で増員され瘦せてぼろぼろの日本人を監視しました。

この交通標識は太陽光を反射する方式で、ビー玉が使われていました。戦後で遊ぶものがない子供たちは、このビー玉を狙い標識から抜き取ろうとよじ登ったりしたものです。

米軍の中古軍服の払い下げが日本人向けに行われました。ものが全くない時代、これは「アメ中の払い下げ」と通称され庶民は喜びました。この米軍のシャツを着て歩いてきた住吉の男のひとが、日本の警察に呼び止められ、まるで米軍から盗んだように言われて困ってしまうこともありまし

た。住吉神社のお祭りが復活し、「だんじり」が、小寺邸の前を通ったとき、アメリカ人たちが出てきて言うには、「そんなものを引っ張っているから日本は負けたのだ、なぜ、タイヤにしてエンジンをつけないのか」でした。日本の文化もなにも理解しない人たちが日本を占領し、さあ、日本人に民主主

義を植え付けるのだと息巻いていたのです。ただ、邸宅の新しい主人たちは案外、気さくに地元を散策していたものと思われま。山田区内では、道行く人にハローハローと呼びかけ、その人は背中に孫をおんぶしていました。孫が、それを聞き、「おばあちゃんはしんりゅうちゃんか？」と祖母に尋ねたという聞き取りもあります。「しんりゅうちゃん」は「進駐軍」で、ハローが、その祖母の名「はる」と聞こえたら

しく、「おばあちゃん進駐軍か？」と尋ねたという笑い話です。

邸宅の接収は住吉村が神戸市と合併してから続き、講和条約発効後の昭和27年（1952年）から28年1月にかけてやっと解除されました。

住友分家邸

位置	兵庫縣武庫郡住吉
設計	住友工作部
施工	藤木工務店
起工	昭和5年12月
竣工	全7年6月
工費	114,000圓
敷地	83坪
建坪	144坪
延坪	206坪
高さ	31尺9
階数	3階地階付
附屬家	25坪
構造	木造



写真⑥ 住友御分家邸（現住吉中学校。交通標識があったのは石垣塀が終わる↑のあたり）



写真⑥ 住友御分家邸（爆撃前）（「近代建築画譜」より）

お屋敷の思い出聞き取り(1)久原邸

住吉歴史資料館事業推進委員

内田 雅夫

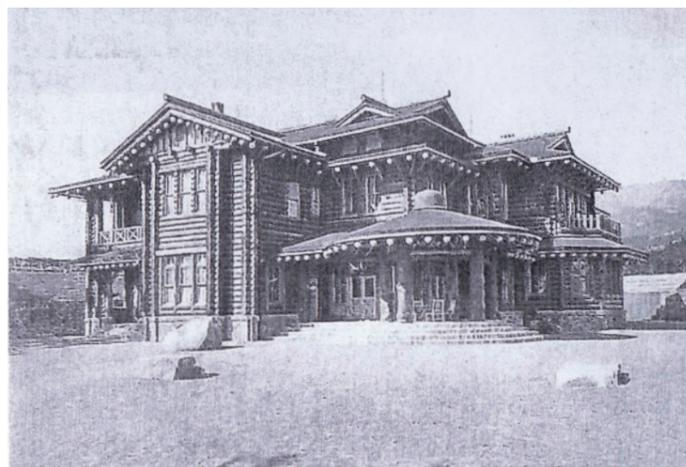


写真① 久原邸より六甲を見る。正面奥にはヘルマン屋敷も見える。林はすべて庭園。多宝塔が見える。(↓のところが法隆寺の名石はここに置かれていたか? (芦屋美術博物館図録「二楽荘と大谷探検隊」より))

資料館だより11号から前田事業推進委員が「日本の富豪村住吉村」を執筆連載しています。

ここでは、その取材余話とでもいいますか、こぼれ話をご紹介します。主には、住吉在住の古老の方々の聞き取りに基づくものですが、

お屋敷の人たちと住吉村の人たちとのほのぼのとした交流が何気なく語られています。このようなことも、住吉村のなんとも言えないやさしさのものとになっており、今に至る人気の住宅地につながるものだと思います。



写真① 久原邸ロシア風洋館「寿昌楼」 大正5年 (「大谷探検隊」芦屋美術博物館)



写真① 久原邸大座敷仏間の前庭 大正5年 (「大谷探検隊」芦屋美術博物館)

まず、川向う野寄(西岡本の旧称)の久原邸から始め連載します。久原邸については、『海鳴りやまず』(神戸新聞社、昭和五四年)の表現では、三万五千坪(山手幹線からJRの線路まですべて。オーキッドコートの場合)、「六甲山中の住吉川より直接引いた水で吉野川を模した清流をつくり、「鵜飼い」をする豪勢さで、法隆寺の巨石をはじめ天下の名石を集めて庭

を造った。更に、子供のために、邸内で本物の汽車を動かして見せた」とあります。

余談ですが、明治の「廃仏毀釈」で奈良の大寺は明治政府にいじめ抜かれます。江戸時代、お寺は人民の戸籍を握っていた権力者であり、また、奈良の諸大寺は皇室や公家の崇敬を集め、あれこれ勢力を持っていた。明治になり、未だ基盤の弱かった

さて、村民との交流の話ですが、幼稚園の「住之江遊喜園」の設立から始めます。

大正六年(1917)、久原房之助氏は保育施設の設立のため社会事業資金を住吉村住之江区(当時は住吉村中区)に寄付しました。仲区民たちはその行為に感謝し、自らの手で敷地の地上げを行い、大正七年に「財団法人住吉村遊喜園」(現在は神戸市立遊喜幼稚園)が設立されました。住吉村字塚ノ後(住吉宮町1丁目)を園舎の敷地としました。土地の一部は村有地であったため、村より無償で借

受けることになりました。

久原さんがなぜ、住吉に幼稚園を寄附したのでしょうか。その訳はこうです。当時、住吉川東の野寄の久原家で飼っていた伝書鳩が行方不明となり大騒ぎしていたところ、住吉村中区の住民がその鳩を保護し、久原家に届けたところ、房之助氏は大いに喜ばれ、是非、恩返しがしたいと思われたため



写真① 現在の久原橋と久原邸跡のマンション

明治新政府は非常に恐れ、いらだっていました。

このため、さしもの法隆寺も財政が傾きかけ、代々の宝物を皇室が買い上げるといふ名目で支援が行われました。これが今も東京に伝わる「法隆寺宝物」です。

庭の由緒ある石や岩も手放しました。京都の野村徳七別邸(本邸は住吉「碧雲荘」)にも、それらの石々が伝わって残っています。住吉の久原邸も恐らく同様な経緯で入手した法隆寺の石が置かれていたのだと考えています。写真では多宝塔のような建物が写っており、これと調和させて石は配置されていたのかも知れません。余談が長くなりました。(写真①)



写真② 住吉小学校講堂内部シャンデリアが見える。



写真② 住吉小学校正面本館。二階が応接室で東の奥に講堂があった。

遊喜園は、住吉が誇る大前方後円墳「東求女塚古墳」の跡に建てられています。古墳には御影石の記念碑があり漢文が彫られています。これは、当時の住吉小学校の訓導(指導官)森川先生が撰んだ文章です。書き出しは、「鳩は安住のねぐらを忘れない」となっており、さりげなく、久原家と仲区住民の交流を後の世に伝えようとしているのです。

運営維持金の寄附とともに同園の経営を住吉村に託しました。住吉村は補助金を出し、昭和十四年(1939)になって村立となりました。今も続く遊喜幼稚園ですが、元は、現役の逋信大臣(今の総務大臣)が経営していた幼稚園でした。

遊喜園は久原家の経営でしたが、国政で多忙な久原さんも手が回らなくなり、昭和二年(1927)十月、

久原さんと住吉村の交流は続きます。つぎは、「ピアノの寄贈」のお話です。久原房之助氏は武庫郡住吉村立住吉尋常高等小学校にグランドピアノを寄贈しています。同校本館は昭和四年(1929年)建築の重厚な建物で、講堂にはシャンデリアが輝い

ていました。ピアノは音楽室に置かれており、昭和三十三年（1958年）ごろまで現役で使われていました。鍵盤の前、ピアノの黒地に金文字で「寄贈 久原房之助」と書かれていました。講堂にグランドピアノがある学校は多々ありますが、音楽室のピアノまでグランドピアノであった小学校はそうあるものでなく、さすが、住吉小学校と誇りに思います。（写真②）

つぎは、住吉神社の「だんじり」と久原さんのお話しです。久原邸のある野寄（東灘区西岡本、旧武庫郡本山村野寄）は本住吉神社の氏子地で、五月の祭礼には宮入を行っているのみならず、存知の通りです。だんじり祭が大正末に兵庫県知事により「危険、蛮風（やばんなこと）」との理由で一時禁止されたとき、野寄のだんじりは久原邸に寄贈されまし

た。久原邸の庭園には大規模な鳥小屋があり、世界中の珍しい鳥類を飼っておられました。この「だんじり」も鳥小屋として金網を張り使用されたと古老は語ります。

戦後の久原邸は建物が撤去されたものの広々とした野原のようで、六甲から引いた水はそのまま流れ、庭園の池も残っていました。これを子供

たちが放っておくはずがなく、朝から晩まで飛び跳ねる遊び場となっていました。

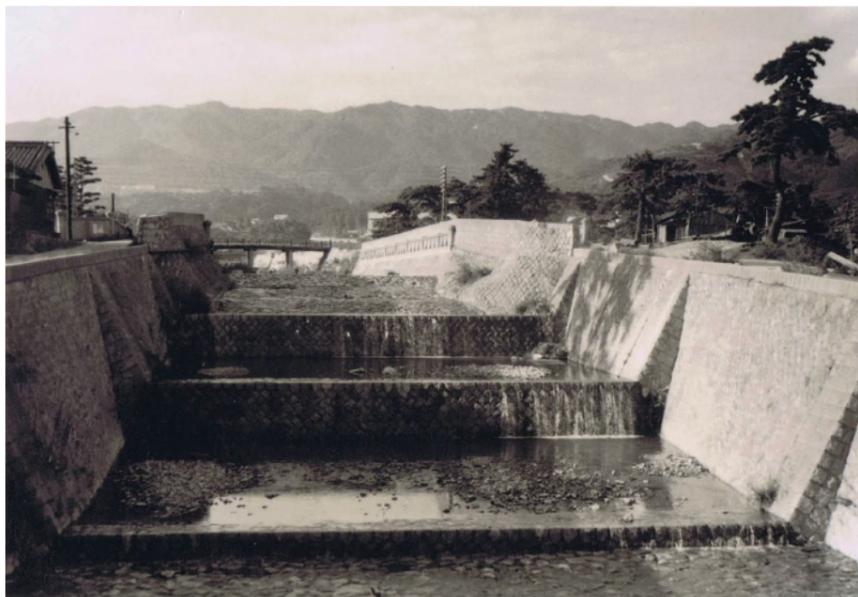
昭和三十三年（1958年）頃、近くに住んでおられた方の子供のころの思い出を、次にそのまますお伝えします。戦争に負けて、やっと平和が戻った頃の感じが、久原邸のあと地を通してよくでていいます。

「久原邸の池はアイキャン池というのですか。私も知りませんでした。六甲山からこんこんと冷たい湧水が出てくる（自然でなく特別にひいていたのですね）きれいな池で夏はよく泳ぎに行きました。（赤腹も泳いでいました）久原邸の池には「鬼ヤンマ」や「トンボ」、草むらには「キリギリス」や「バッタ」、花の咲いている所にはいろいろな種類の「蝶々」など昆虫がいっぱいて今では考えられない自然環境でした。久原邸や、ヘルマン屋敷跡（注…今の西岡本ヘルマンハイツ）は家から近かったこともあり子供のころの格好の遊び場でした。久原橋の架け替え工事の時は毎日のように現場に行つて遊んでいた記憶があります。」（写真③）

戦争には負けてしまいましたが、子供たちにも平和がよみがえった安心した日々が感じられる昭和の三十年代のお話しです。



写真③ 左に久原橋、奥が久原邸あと。ビルは川鉄社宅だが、このあたりもすべて久原邸でした。昭和35年頃（反高区中田さん提供）



写真③ 正面に久原橋。まだ木造橋です。右側一帯が久原邸あと。庭園の赤松林が見える。昭和35年ごろ（反高区中田さん提供）

明和六年、尼崎藩領海岸沿い村々の上知と幕府の意図

神戸大学大学院人文科学研究科地域連携センター研究員・奈良教育大学准教授・住吉歴史資料館専門委員 山崎善弘

尼崎藩領の性格

尼崎藩は、豊臣秀頼領の尼崎郡代であった建部政長が、大坂の陣の功によって、元和元年（一六一五）に一万石の大名に取り立てられたことから始まった。しかし、尼崎・明石・姫路に譜代大名を配置し、大坂城の西の守りを固めるといふ幕府の構想の下で、元和三年（一六一七）に政長は播磨国揖東郡林田へ移され、代わって近江国膳所から譜代大名戸田氏鉄が尼崎に入った。氏鉄は幕府の命令で新尼崎城を築くとともに、新城下町を造成し、以後の尼崎藩の礎を築いた。戸田氏の領地は摂津国川辺・武庫・菟原・八部にわたる五万石であり、他の大名の飛び地や旗本領がいくらか介在してはいたが、西摂の海岸線一帯を支配する領国的傾向が強かった。

寛永一二年（一六三二）に、氏鉄は美濃国大垣に移され、代わって遠江国掛川から譜代大名青山幸

表1 宝永8年、尼崎藩松平氏の領地

郡村名	村高	郡村名	村高	郡村名	村高
〔川辺郡〕	石合	時友	307.973	*東青木のうち	136.844
額田のうち	34.500	武庫	325.691	*西青木のうち	186.290
神崎	336.477	東武庫	267.580	野寄	181.357
	28.666	東今	278.791	郡家のうち	94.216
西川	218.393	浜北	567.193	*田中	118.170
今福	205.720	東大島	533.200	*住吉	558.559
枕瀬	861.	西大島	360.067	*横屋	415.129
梶島	120.	東新田	421.344	*魚崎	44.142
中洲	320.300	西新田	285.891	平野のうち	100.900
西長洲	815.995	角右衛門新田	577.368	*御影のうち	338.394
中長洲	842.300	道意新田		高羽	295.499
西東物	678.382	又兵衛新田		八幡のうち	163.871
大波	1,028.323	上段	123.178	*石屋	208.802
東西難	833.794	高木のうち	343.700	高賀毛	230.200
竹谷新		助兵衛新田		*河原のうち	168.463
尼崎嶋	600.	上瓦	438.733	森	100.190
葭	68.120	下瓦	363.931	*大石	180.670
新城屋新		田林	395.747	九郎右衛門新田	
初島新	553.010	広田	1,177.864	*味野	132.200
別所	1,277.827	津門	233.200	上野	270.690
塚富	1,475.263	*今津のうち	2,223.132	原	216.055
尾松	566.030	*西宮		*岩屋のうち	219.522
上之島	502.988	*越木岩新		中田	237.627
	106.756	小曾根	167.530	*生野	375.486
栗山	494.017	小松	603.448	*小野新	
大西	358.166	小計	10,934.616	小計	8,420.802
三反	696.192	〔菟原郡〕	石合	〔八部郡〕	石合
荒牧	923.588	*打出	674.967	生田	40.030
荻野	512.728	*芦屋	532.888	*神戸	441.663
鷗池	497.139	津知	106.550	*ニツ茶	72.787
山田	426.734	三条	197.490	*走水	33.416
南野のうち	743.964	森	315.395	坂本	291.814
小計	16,126.372	中野のうち	78.	*兵庫	2,626.300
〔武庫郡〕	石合	北畑	307.150	*同所	1,012.200
西富	221.522	田辺	91.430	地子	
西昆	353.645	小路	171.642	小計	4,518.210
常松	201.905	小岡	383.131	計	40,000.000
常吉のうち	161.983	*深江	517.743		

〔注〕「尼崎市史」2巻より

表2 明和6年、幕府領として公収された灘地域の村々

公収を受けた領主名	武庫郡	菟原郡	八部郡
尼崎藩 松平氏(信定系)	今津のうち・西宮・越木岩新田	打出・芦屋・深江・東青木のうち・西青木・田中・横屋・住吉・魚崎・御影のうち・石屋・河原のうち・大石・味泥・岩屋のうち・生田・小野新田	神戸・ニツ茶屋・走水・兵庫津
丹波国藤山藩 青山氏(忠俊系)	鳴尾のうち	東青木のうち・御影のうち・郡家のうち・平野のうち	花熊
大和国小泉藩 片桐氏(貞隆系)		河原のうち・熊内	
下総国古河藩 土井氏(利昌系)		徳井・東明	
旗本 青山氏(幸正系)		筒井	
旗本 青木氏(可直系)		脇浜	鳥原
旗本 船越氏(景直系)			
村数	4	24	6

〔注〕「尼崎市史」2巻より

成が尼崎に入り、戸田氏の領地をそのまま引き継いだ。しかし、幸成の遺言によって、次男・三男・四男への分知が認められ、以後尼崎藩の領地高は四万八〇〇〇石に減った。

次いで宝永八年（一七二一）、青山氏が信濃国飯山に転じた後、掛川から徳川氏庶家の一つ桜井松平の松平忠高が四万石で尼崎に入った。青山氏の時

代より八〇〇〇石減って四万石を領有することになったのだが、その領地はやはり西摂の海岸線一帯を支配する領国的傾向を保持したままであった。しかし、松平氏の領地は、明和六年（一七六九）に劇的な変化を遂げることになるのである。

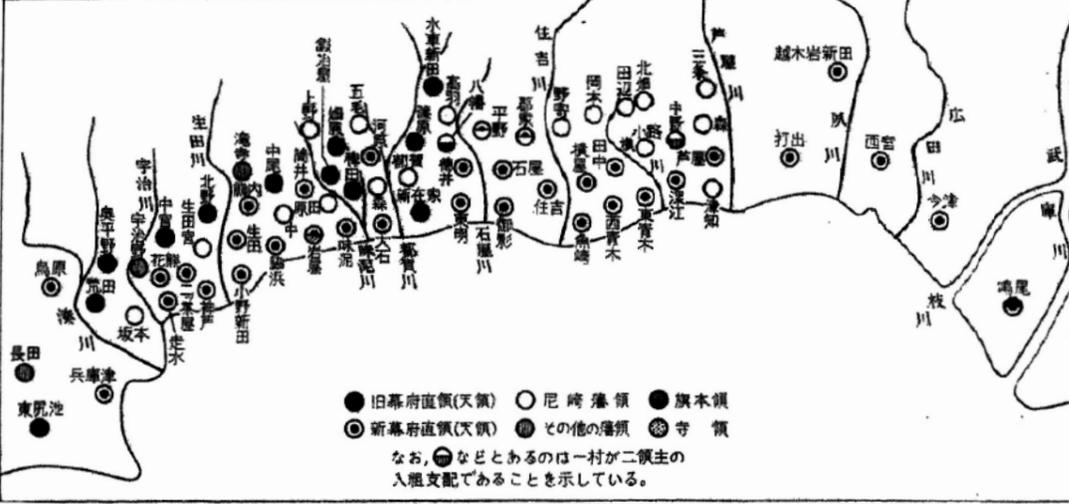
明和六年二月三日、幕府は尼崎藩に対し、その領地のうち二四力村、高にして一万四〇〇〇石余の上知を命じた。表1は、宝永八年時点の松平氏の領地構成を示したものである。このうち*を付した村々が上知の対象となったのである。武庫郡のうち三力村、菟原郡のうち一七力村、八部郡のうち四力村が、尼崎藩の手を離れ、

幕府領となったことがわかる。尼崎藩領のうち、実に三五%が幕府領として公収されたのであった。

上知の対象となった村々の特徴は、

それらが海岸沿いの灘地域の村々であるということである。当時、幕府は西摂一体の幕府領化を自論んでいた。したがって、上知の対象となったのは、尼崎藩領の村々に限らない。表2は、明和六年に上知の対象となった全ての村々を示している。尼崎藩領の他に、丹波国篠山藩領・大和国小泉藩領・下総国古河藩領、また三旗本の知行所も上知の対象となったことがわかる。この時、上知の対象となった村々は、武庫郡内で四力村、菟原郡内で二四力村、八郡郡内で六力村、合計三四力村に上ったが、そのうち尼崎藩領の村々が占める割合は七〇%余であった。尼崎藩領が西摂の海岸線一帯を支配する領国的傾向を持っていたがゆえに、同藩領の村々は上知の主な対象とならざるをえなかったのである。

図1 明和6年、上知後の灘地域支配関係図



[注]「尼崎市史」2巻より

図1は、上知後の灘地域の支配関係を示したものであるが、すでに尼崎藩領が領国的傾向を失い、代わって幕府領が海岸線一帯を占めるに至ったことが了解されよう。

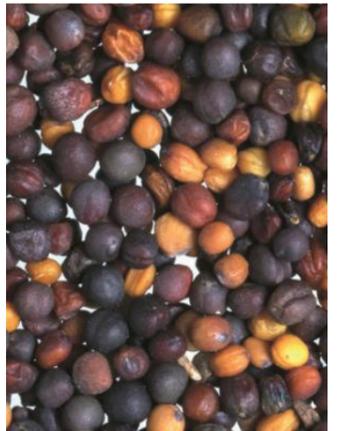
幕府による上知の意図

では、なぜ幕府は明和六年の上知を断行したのであるか。すでに述べたように、幕府は西摂の海岸線一帯を支配するために上知を断行したのであるが、ここで問題とするのは、なぜそのようなことが必要であったのかということである。そのためには、この上知に至る経緯を知る必要がある。上知より三三年後の享和二年（一八〇二）に、小普請組に属していた幕吏植崎九八郎が認めたと書によると、宝暦二年（一七六二）から明和七年（一七七〇）まで長崎奉行であった石谷清昌が、江戸―長崎の行き帰りに兵庫津や西宮の豊かな様子を見て、灘地域を幕府領に公収するよう老中に上申した。このため幕府は明和六年の上知を断行することになったのである。つまり、幕府は西摂の経済的な豊かさに目を付けて、上知に踏み切ったのである。

西摂の経済的な豊かさを示すこととして、灘地域が新興の酒造地帯として発展していたことが挙げられる。現在の灘地域も酒造地帯であることから、現代人にとってはそのイメージが強いかもしれない。しかし、西摂全体でいえば、油業の発展が著しく、幕府にとっては、むしろこちらの方が重要な意味を持っていた。一八世紀に入ると、西摂の村々では水車の建設が進み、急速に絞り油業が展開した。



綿実



菜種

代が続き、各地で経済的発展が現出する中で、幕府は軍事よりも経済政策を優先するようになるのである。大坂は本来、大坂城を中心とした軍事的拠点としての性格を持っていたが、やがて「天下の台所」と称され、経済都市としての性格を強く帯びていく。そうした中で、幕府は、大坂と

地続きであり、しかも高度に経済的に発展した西摂を大坂とワンセットにして、軍事的役割を縮小する一方で、その経済力を掌握する政策を展開したのである。幕府にとっての関心は、軍事的問題よりも経済的問題に移っていた。明和六年の上知はその立場から断行されたのであった。

（二七六六）、幕府は大坂以外の地域での絞り油業を禁止する法令を発した。この法令は西摂以外の地域も対象としているが、その主眼は西摂の村々での絞り油業に圧迫を加えることであつた。しかし、摂津・河内・和泉の村々からこの法令に対する強い反発が出たため、幕府は明和七年に同三年の法令を改正し、摂津・河内・和泉の村々村における絞り油業を許可することにした。ただし、それは絞り油屋の株仲間への加入を強制し、株仲間の元締めたる大坂の油問屋へ、絞った油を全て送ることを条件とするものであつた。

つまり、幕府は西摂における絞り油業の発展を前に、同地域への支配を拡大強化しようとしたのであり、その結果、西摂からの圧迫を廃することで、大坂の油問屋の機能を回復し、江戸への油の供給量を確保しようとしたのである。

このような幕府の動向を踏まえると、明和六年の上知は、幕府が西摂を直接支配することによって、大坂の油問屋への西摂からの圧迫を根本的に廃し、その経済力を大坂の油問屋の下に編成し直すことを意図したものと捉えることができる。一年後の明和七年の法令改正は、まさにそのような意図の具体的表現といえよう。

幕府政策の転回

明和六年の上知によって、尼崎藩は

財政窮乏に陥った。幕府は尼崎藩領のうち二万四〇〇〇石余を上知しただけではなく、その替え地を同藩に与えている。それを示したのが表3である。播磨国多可郡のうち九力村、宍粟郡のうち三力村、赤穂郡のうち三力村、合計七一力村、高にして一万九〇〇〇石余であった。単純計算すれば、尼崎藩は五〇〇〇石の増収となったように思われるが、実際は、西摂の高度に経済発展した村々と、それらに比べれば生産力の劣った村々との交換であり、同藩は財政窮乏に陥ることになったのである。

したがって、明和六年の上知は、尼崎藩にとって画期的な事件であつた。しかし、それはより広い目で見れば、幕府政策の転回を示す画期的な事件であり、そうした動向の中での尼崎藩にとつての悲劇であつたといえる。先に述べたように、近世前期において、幕府は尼崎・明石・姫路に譜代大名を配置し、大坂城の西の守りを固めるといふ構想を持ち、以後、その構想の下で、尼崎藩は軍事的要所としての地位を築いてきた。尼崎城は陸海両方の関所として、大坂を守る重責を担ってきたのである。しかし、天下泰平といわれる平和な時

表3 明和6年、尼崎藩に替え地として与えられた播磨国の村々

郡村名	村高	郡村名	村高	郡村名	村高
〔多可郡〕	石合	有 賀	136.114	竹 万	.420
中 安	540.696	皆 木	274.807	野 山	81.553
中 平	172.335	安 野	263.328	西 福	320.057
大 野	220.804	小 下	127.792	正 名	72.560
西 門	120.517	日 野	15.017	神 治	374.239
大 島	323.911	深 谷	75.211	宇 田	234.177
津 野	140.639	伊 谷	116.039	高 尾	238.718
小 井	259.612	和 ち	135.344	奥 谷	389.346
	.858	安 野	338.320	長 桑	564.454
中 野	162.667	清 上	113.775	野 倉	21.864
下 野	562.980	野 野	335.260	鍋 地	590.723
小 計	2,511.019	東 野	207.523	釜 出	138.864
〔宍粟郡〕	石合	西 植	312.230	金 釜	76.327
岩 野	874.064	植 木	289.148	釜 野	153.851
西 山	486.029	三 狭	105.594	野 中	.104
千 草	562.199	小 計	8,038.745	森 生	113.643
室 河	347.777	〔赤穂郡〕	石合	瓜 上	360.985
黒 下	235.068	行 大	143.525	下 寺	.264
船 河	205.934	高 山	70.813	下 上	219.560
上 河	274.403	岡 細	355.606	下 世	104.627
下 野	238.033	細 小	207.200	野 計	339.145
上 野	345.857	大 大	108.347	小 計	1.086
下 野	322.460	井 野	250.606		571.724
上 野	189.610	大 上	383.371		8,518.538
漆 野	263.719		299.946		19,068.352
上 野	218.083		461.894		
中 野	229.509		449.236		
	47.705				

[注]「尼崎市史」2巻より